

3

つの重要戦略で導く

マルチクラウドの 成功

マルチクラウドとハイブリッドクラウドの
複雑さを克服するデータ活用



splunk >
turn data into doing™



俊敏性、レジリエンス(回復力)、イノベーションの向上を目的としたクラウドの活用が加速しています。コストを最適化しながら優れたサービスを利用するために、マルチクラウド環境やハイブリッドクラウド環境の導入も進みました。しかし、それぞれに何百ものサービスを持つパブリックとプライベートのクラウドが複数あり、その中にはオンプレミスのワークロードと連携しているものもあるのです。当然の結果として、複雑さは飛躍的に高まり、新たな課題をもたらしています。

環境が分散していたり、サイロ化していたりすると、可視化や統制はさらに難しくなり、攻撃にさらされる対象が拡大すれば、セキュリティリスクも高まります。潜在的な障害点が増えれば、ダウンタイムによる損失の増大にもつながるでしょう。マルチクラウドとハイブリッドクラウドへの移行が進む中でこうした懸念がたびたび指摘され、多くの組織において、成長が速すぎて管理の複雑化に対応しきれなくなるのではないかという疑念が生じています。ある第三者機関の調査では、マルチクラウドの価値は労力とトラブルに見合わない可能性があることさえ示唆されました。¹

それでも、顧客にイノベーションを提供しようとする組織にとって、幅広いクラウドサービスを利用できるマルチクラウドは避けて通れません。デジタルトランスフォーメーションの推進や、新たなデジタルカスタマーエクスペリエンス創出には、マルチクラウドが不可欠です。そして、短命や分散を特徴とするマイクロサービスやサーバーレス関数などのクラウドネイティブなテクノロジーを利用したアプリケーションやエクスペリエンスでは、信頼性とセキュリティの確保が必須となります。数秒のダウンタイムが何百万ドルもの損失を招き、1回のセキュリティインシデントでブランドが修復不能なダメージを負うこともあるのです。

幸いにも、マルチクラウド環境やハイブリッドクラウド環境の管理戦略で、複雑さの克服が期待できます。また、新しいテクノロジーに対応したデータバックボーンとして機能する専用ツールもあります。IT運用、DevOps、セキュリティチームを含めた包括的なデータ戦略が可能になり、クラウドによるトランスフォーメーションを加速できるでしょう。ここでは、そのために重視すべきポイントをご紹介します。



¹ 戦略コンサルティングおよび世論調査を行う独立系のClearPath Strategies社が実施した、米国と英国のクラウド購入意思決定者を対象にした調査。

マルチクラウドとハイブリッドクラウドの複雑さに対処する

マルチクラウド環境へ全面移行する組織が増えていますが、多くの場合、意図した移行ではなく、インフラやアプリケーションが考える以上に広く分散していることが少なくありません。この流れはまだまだ続く見込みで、92%の企業がマルチクラウド戦略を、80%がハイブリッドクラウド戦略を採用しているという調査結果があります。²

外部クラウドサービスの有効活用を妨げている最大の要因は、複雑さ。

これらのクラウド戦略を進めるにあたり、組織はいくつかの課題に直面します。特に多いのは、セキュリティ(81%)、クラウド経費の管理(79%)、マルチクラウドの管理(72%)に関する課題です。³ 専用ツールや専用チームがあっても例外なく、いかにしてセキュリティを確保し、運用し、イノベーションを推

進するかを悩ましています。実際に、外部クラウドサービスの有効活用を妨げている最大の要因は、複雑さです。⁴ 急速な成長の結果、組織の持つ管理能力を超えるほどにシステムが分散した結果です。さらには、迅速な対処に必要な可視性や、ノイズの中からシグナルを読み取る能力も欠けていることが、複雑さに拍車をかけています。現状では、障害が発生したときにそれぞれの原因や問題点、解決策が直ちに分かる組織は3分の1もありません。⁵

先駆的組織は、クラウド活用の推進を妨げるこの課題を克服するために、環境全体に対するエンドツーエンドの可視化と分析を可能にする、拡張性の高い統合データプラットフォームを採用し始めています。こうしたプラットフォームに必要なのは、セキュリティ運用チームが脅威を発見して予防できるようにするだけでなく、組織のセキュリティ体制を完全に管理できるようにするための機能です。また、コンテキストとパフォーマンスの管理を向上させる、フルスタックのオブザーバビリティも必要です。それがあれば、開発者は問題を速やかに解決するための可視性を得ることができ、イノベーションに注力できるようになります。ソースや規模を問わず、あらゆるデータを活用できるようになれば、組織はマルチクラウド環境とハイブリッドクラウド環境のメリットを得ることができます。



2、3 Flexera 2021 State of Cloud (Flexera2021年クラウド調査)レポート

4、5 戦略コンサルティングおよび世論調査を行う独立系のClearPath Strategies社が実施した、米国と英国のクラウド購入意思決定者を対象にした調査。

セキュリティを データ活用の機会に変える

セキュリティ対策は終わりのないイタチごっこです。次々新しい脅威が現れ、脆弱性が悪用されます。被害に遭っている組織が気付かないことも少なくありません。脅威は巧妙化しており、分散環境でラテラルムーブメントの機会が増えれば増えるほど、攻撃が長期にわたって気付かれずにいる危険性も増します。実際、攻撃が発見されるまでにかかる時間は、平均で**17～19日間**です。数々の侵害を引き起こし、ここ数年で最も衝撃的だったSolarWindsへの攻撃は、2019年に開始されたにもかかわらず、発見されたのは1年以上後でした。

アプリケーションとインフラについて、包括的な視野を確保できれば、セキュリティリスクを恐れて俊敏性やイノベーションをあきらめる必要はありません。

マルチクラウドやハイブリッドクラウドのインフラでは、セキュリティの懸念がさらに増大します。今日、ビジネスクリティカルなワークロードやアプリケーションの少なくとも半分以上がクラウドにある組織は41%で、さらに53%の組織がビジネスクリティカルなワークロードのすべてがクラウドネイティブだと回答しています。⁶ このような環境下では、膨大な量のセキュリティアラートが発生することで、チームがプロアクティブな改善よりもその場限りの緊急対応に終始するといった問題が起こりがちで、Splunkの**セキュリティ調査レポート**において78%の組織が、規模拡大に対するサイバーセキュリティチームの対応力について1つ以上の課題を抱えていると報告しているのも不思議はありません。そもそもクラウドへの移行は非常に大きな環境変化であり、組織内の要件を満たすためには、もともとオンプレミス環境を想定していたプロセスを記録的な速さで全面的に見直さなければならず、同時にエンドユーザーの期待にも応えていく必要があるのです。

クラウドネイティブに関連するセキュリティの課題としてはこの他に、データセンターとクラウド間における整合性維持の難しさ(50%)や、複数のセキュリティコントロールを適用することによるコスト増および複雑化(42%)が挙げられています。⁷ クラウドサービスによってデータ形式やソースが異なる場合は、監視が環境ごとにサイロ化しやすく、データの移動がコンプライアンスに影響する可能性もあります。

6、7 [Splunkセキュリティ調査レポート](#)

このような環境の変化において有効なのが、可視性とリアルタイムなインサイトです。環境全体のアプリケーションとインフラについて、包括的な視野を確保し、プロセスを確立できさえすれば、セキュリティリスクを恐れて俊敏性やイノベーションをあきらめる必要はありません。

全体を適切に可視化することで、状況を明確に把握し、マルチクラウド環境とハイブリッドクラウド環境全体を監視、調査、分析して脅威を検出できると同時に、そのプロセスの中で組織のセキュリティ体制を統合し、強化することも可能になります。さらに、分析担当者が脅威をすばやく察知して、調査し、対応していくためには、データに基づく自動化とオーケストレーションもセキュリティ機能として欠かせません。これらの機能があることで、分析担当者は判断を要する点にのみ注力できるようになり、対応にかかる時間や対応可能な規模、作業の効率が飛躍的に向上します。



マルチクラウドのメリットを オブザーバビリティで引き出す

組織は、マイクロサービス、サーバーレス関数、コンテナという形で、クラウドネイティブなテクノロジーを急速に導入しています。こういった分散アーキテクチャにおける短命なインフラや相互依存関係のすべてを、従来の監視技術やツールで追跡するのは無理があります。

そのため、最新のシステムを効果的に監視する手段としてオブザーバビリティを採用するケースが増えています。オブザーバビリティとは、システムの出力(メトリクス、トレース、ログなど)を調査することによって、内部の状態を測定できる能力を指します。これにより分散システムを詳細に可視化して、問題の根本原因の究明やシステムのパフォーマンス向上につなげます。

この新しい手法には、どれほどのメリットがあるのでしょうか？

Splunkの**オブザーバビリティ調査レポート**では、オブザーバビリティの導入が進んでいる組織が、デジタル化の取り組みやイノベーションを大幅に改善および迅速化していることが明らかになっています。これらの組織は、導入が進んでいない組織と比べて、このような成果をあげています。

アプリケーション
パフォーマンスに
対する可視性が
2.9倍

パブリッククラウド
インフラに対する
可視性が
約**2**倍

セキュリティ体制に
対する可視性が
2.3倍

多くの革新的な製品や
サービスをリリース—
昨年の新製品数は
60%増加

オブザーバビリティ活用が成熟した組織があげている成果から、特にマルチクラウド環境とハイブリッドクラウド環境におけるメリットが分かります。成熟の鍵となるのは、ソースを問わずあらゆるデータを収集して分析することを可能にする、包括的なアプローチです。これには、フロントエンドからバックエンドまで、スタック全体を対象に、コンテキストに即したエンドツーエンドの可視性とリアルタイムなインサイトを提供するプラットフォームが欠かせません。今のうちにオブザーバビリティを真剣に検討しなければ、いつか必ず競争力を失うことになります。

将来に向けて

組織にとって必要なのは、何が欠けているのかを見定め、クラウド担当チームから経営陣までを網羅する戦略を策定して、環境を管理することです。マルチクラウドおよびハイブリッドクラウドの可視化と統制には、以下を備えたデータバックボーンが欠かせません。

- 拡張性の高い統合プラットフォーム
- 脅威を発見して予防し、セキュリティ体制を完全に統制できる、最新のセキュリティ運用
- パフォーマンスとコストを把握、管理すると同時に、開発者が生産性を発揮するために必要な可視性を提供できる、フルスタックのオブザーバビリティ

一元化された可視化、トラブルシューティング、分析主導のガイド付きアクションや自動アクションを、クラウドジャーニーのあらゆる段階で利用できれば、組織は複雑さを克服して、クラウドトランスフォーメーションが持つ力を実現することができます。

後れを取ってはいませんか？ [今すぐにクラウド活用を加速しましょう。](#)

© 2021 Splunk Inc. 無断複写・転載を禁じます。Splunk, Splunk>, Data-to-Everything, D2EおよびTurn Data Into Doingは、米国およびその他の国におけるSplunk Inc.の商標または登録商標です。他のすべてのブランド名、製品名、もしくは商標は、それぞれの所有者に帰属します。

21-19630-Splunk-3 Essential Strategies for Multicloud Success-LS-JA-202111

splunk >
turn data into doing™